

2012年6月16日・西日本新聞「人物現在形」欄では

エッセー集「ローランサンの橋」刊行

少女の祈りに似た「ささやく声」で福岡大空襲を描く

門田照子さん（詩人）

警報が鳴り響く中、翼をきらきら輝かせて飛来した爆撃機B 29を見上げて、少女らがつぶやく。

「綺麗かねえ」

「ほんとやねえ」

むごくて醜い飛行機だと大人から聞かされていても、その澄んだ目に美しく映ったものを率直に美しいと口にする彼女たち。

その無垢の視線などお構いなしに飛行機は胴体から油脂焼夷弾を降らせ始める。

67年前の6月19日夜、福岡大空襲は始まった。

福岡市在住の詩人門田照子さん（77）がその日付で出版するエッセー集『ローランサンの橋』は戦時中から戦後にかけての個人史であり家族史だ。

空襲体験を柱とする「水中を逃げる夢」を、5章構成の初章に置いた。戦後半世紀の1995年前後、詩誌『えん』に連載したものを再録した。

悲しみ、怒り、憎しみなど思い出すたびに破裂しそうになる負の感情を極力抑え、少女の目で見、少女の耳に聞こえたことのみをつづった。隠し立てもなければ、よけいな誇張もしない、空襲の記憶である。

「大人の視点、大人の意識で書こうとすると、どうしても創作が入り込みますので、当時10歳だった私の目に映ったままを、そして、経験したままを書こうと努めました」

門田さんは、「防空壕に一人で入っているのが怖くなって」そこから抜け出し、「洗濯物を抱えて」福岡市を流れる樋井川の橋の下に逃げ込んだ。油脂焼夷弾の炎が「水の上もめらめらと燃え奔」っていた。すぐ近所のK子ちゃんもそこにいた。二人とも家族にはぐれて一人だった。

長い一夜が明け、焼け跡の一角に人々が立ちすくんでいる。「見てはいけないと制されて」近寄れない門田さんの耳に大人たちの「ひそやかな声」が聞こえる。

「息子さんと手ばかり合せて、直撃やったげな」

「真っ黒い棒になってしもうて、お気の毒になぁ」

無残な姿になってしまったのは、橋の下で共に恐怖の一夜を明かしたK子ちゃんの家族だった。この体験を門田さんは、詩にもしている。

〈五十五年間生き延びてきた無傷のわたし／振り向けば後ろに煤けた炎の道／忘れないで 忘れないで と／悲痛に歪んだ人影が走ってくる〉（「火炎忌」より）

「昨年の東日本大震災のとき、すさまじい光景を見ているうちに空襲のときの体験がよみがえってきて、とても苦しい思いをしました。防空壕から飛び出した私はたまたま生き延びましたが、死んだ人は時間を永遠に奪われてしまいましたから…」

〈忘れないで 忘れないで〉という死者たちの悲痛な声を受け止めながら門田さんは戦後を生きてきたのだった。

機銃掃射や戦地で二人の息子を亡くした義母の悲しみを、大分方言で書いた詩もある。

〈あん子は血い塗れじ横転っちゃっ／取りついてん 揺さぶってん もの言わん／何が可愛想えち 人間 腹ん切れち／腹こかし出しち殺されるぐれえ／辛いこたあ無え〉（「流出」より）

この詩を含め門田さん自身が朗読してCDにした第一詩集『巡礼』がある。2001年から地域の学校や公民館など

で空襲の語り部活動もしてきた。

門田さんの詩もエッセーも朗読もCDも、戦争というとても巨大な暴力からすれば、もちろんごく小さな声に過ぎない。

だが、それらを読み、朗読の声を聴いているうちに、旧約聖書「列王記上 19章」の記述が思い起こされた。

預言者エリヤが、激しい風でもなく地震でもなく火の中でもなく、「静かにささやく声」に神の言葉を聴いたという一節である。

この一節の宗教的な暗喩は置くとして、その表現を借りて言えば、市民を無差別殺傷した空襲の真実を語り継いでいく上で力を持ち得るのは、荒々しい大声よりもむしろ、少女の祈りにも似た「ささやく声」ではないだろうか。(井出俊作)

**と紹介されています。**